中国文学この百年

藤井省三

新潮選書

百年の中国文学、それは20世紀初頭における文学の誕生、1930年代の成熟、人民共和国体制下の死滅、そして80年代に到り奇跡的に甦るまでの歴史である。中国文学はその誕生以来、魯迅から現代作家に到るまで、共和国建設を願う知識階級の自己表現であった。1989年6月4日「血の日曜日」事件以後いよいよ混迷深まるなか、中国が模索する新しき共和国とはいかなるものか、百年の回顧は90年代、そして21世紀への展望となるであろう。　著者

中国文学この百年　〈新潮選書〉

一九九一年二月一五日　印刷
一九九一年二月二〇日　発行

著者　藤井省三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　業務部(0303)三二六六—五一一一
編集部(0303)三二六六—五四一一
振替東京四—八〇八番

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社大進堂

© Shozo Fujii 1991, Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-600395-3　C0398
価格はカバーに表示してあります。

新潮選書

中国文学この百年 * 目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一部　百年の回顧

百年の中国文学　11
詩人たちの共和国——魯迅から老木まで　33
中国新聞事始　49

第二部　文学者とその時代

智識階級の再生——五・四運動七十周年　56
盲詩人の予見——エロシェンコ　60
人力車の北京——老舎　65
旗袍（チャイナドレス）の上海——茅盾『子夜』　70

共和国の興亡と文学——巴金・柏楊　75
ノヴェルとしての『古代服飾研究』——沈從文　79
日米関係としての中国文学——林語堂　84
魔都の無名氏——羅信耀と『北京風俗大全』　88
ロマンスは東西文明論——張愛玲の上海・香港　92
国家論としての恋愛小説——錢鍾書『囲城』　96
人民文学から通俗文学へ——趙樹理と馮驥才　100
少年ボルシェビキと美しき共和国——王蒙　104
食うべき小説——傷痕文学から阿城へ　108
ある抵抗詩人——北島　112
再興智識階級のイデオローグ——劉再復　117

美麗島（フォルモーサ）の愛と性——女流作家李昂　121
「大東亜共栄圏」の後日譚——李双沢　126
失われたチベット——ザシダワ　129
驚異的なる中国農村
——鄭義『古井戸』と莫言『赤い高粱一族』を読む　133

第三部　魯迅の読み方、読まれ方

〝真犯人〟を探せ——魯迅「故郷」のミステリー　150
消えた魯迅日記　155
魯迅と蕗谷虹児——イノセンスの系譜　158

魯迅と『版芸術』誌——戦争版画をめぐって　164
魯迅はターザン映画が大好き　179

第四部　日本と中国

特集号の中国イメージ——大正末年『改造』「現代支那号」　189
中国、砕ける——開高健と老舎の死　194
巨大な闇としての中国農村　211

あとがき
年表
索引

中国文学この百年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一部　百年の回顧

百年の中国文学

一　はじめに

一九八九年六月四日未明、北京天安門広場において戒厳軍が学生・市民を虐殺した血の日曜日事件は、全世界に大きな衝撃を与えた。この事件をきっかけとして、中国全土に反自由、反民主の嵐が吹き荒れ、文芸界も多くの犠牲を出した。民主化運動に積極的に参与していた文学者に、消息不明の者が少なくない。そればかりか、思想統一のための学習会が各地の作家協会で開かれる一方、出版物の検閲が大規模に行われ、〝ブルジョア自由思想〟を宣伝する〝毒草〟として大量の図書が差し押さえられたという。

一九七〇年代末に鄧小平体制が確立して以来、開放経済政策の推進下で、中国文学は幾多の曲折を経ながらも驚異的な展開を遂げてきた。特にここ四、五年来、傑作が陸続と発表されており、中国大陸はラテン・アメリカなどと肩を並べ世界文学の最先端に躍り出ようとしていたのである。

血の日曜日事件以来の反動体制は、一体どのような影響を文芸界に及ぼすのであろうか。

このように問い直すとき、中国三千年の文字表現の歴史において、〝文学〟という制度はたかだか百年ほどの時空を経ているに過ぎないことを忘れてはなるまい。そして文学制度がほぼ固まる一九二〇年代以来、約十年周期で大きな変動が生じており、それが中国大陸における政治の動向と直結している点も、改めて押さえておく必要があろう。血の日曜日事件と現在の、そして将来の中国文学との関係性は鄧小平体制下で突然形成されたものではなく、中国文学がその誕生以来、自ら求め続けてきたあり方の一局面であると言えよう。

本章では、中国における共和国建設と文学とが不可分であった百年の歴史を概観してみたい。

二　文学の誕生——辛亥革命前後

文学という概念及びこれをめぐる諸制度の起源は近代社会の成立と軌を一にする。例えばフランスで文芸＝ベル・レットルという伝統的語彙に代わり、文学＝リテラチュールという言葉が登場するのは十八世紀末のこととされ、日本で翻訳語としての文学が創案されるのが一八七〇年代であった。さて中国においては元来「文章博学」の意味であった文学が、Literature の訳語として日本から逆輸入されるのが十九世紀末のこと、以後清末の改良・革命両派により国民国家建設との関わりでさまざまに論じられる。

中国の改良、または革命の必要性を多数者の理性と感性に訴える手段として、当初〝文学〟は理解される。それとても変革の主体を土地所有制と科挙制度により清朝支配体制に組込まれていた士大夫（したいふ）階級に求めるのか、それとも商人、在外華僑、富農、秘密結社などに新たな主体を認めるのか、またその場合、士大夫階級が独占していた文語文に代わり商人層らの理解を得やすい口

語文を採用すべきなのか、そして口語文に近代国家形成の論理を表現する力があるのか、そもそも近代ヨーロッパに誕生した国民国家（ネーションステート）とは何であったのか……といった錯綜した議論が、清末知識人の間で熱っぽく論じられている。こうした議論の渦の中で、魯迅（ルーシュン、ろじん、一八八一～一九三六）とその弟周作人（チョウ・ツオレン、しゅうさくじん、一八八五～一九六七）は留学先の東京で国民国家形成における文学の役割を説いたロマン派詩人論、近代文学論を執筆、さらに『域外小説集』二巻を刊行して欧米の近代小説の紹介を行っている。

魯迅・周作人がいわば近代国家の言説としての文学に注目していたのに対し、国家及び文学を支える諸制度の変革と建設に関心を払っていたのが胡適（フー・シー、こてき、一八九一～一九六二）であった。

辛亥革命（一九一一）の前後七年間アメリカに留学した胡適は、国民的融和を図る一大イベントであり演説や新聞による議論が全階層で展開される大統領選挙を二度体験、当時南欧・東欧から言語宗教を異にする移民を大量に迎え社会的危機に瀕していたアメリカに比べ、漢族が圧倒的多数を占める中国には、国民国家形成のための有利な条件が備わっていると、楽観する。滞米中に進化論を応用して「士大夫階級＝文言、下層民＝白話（古典口語）」という従来の言語意識を逆転する口語文学優位の言語観を獲得した胡適は、一躍文学革命（一九一七）の旗手となり、帰国後は白話を基礎とする標準語が国民国家を創出するという言語論を展開、北京大学を始めとする教育界改革に乗り出すのであった。

辛亥革命により三百年続いた清王朝は倒れ、アジアで最初の共和国、中華民国が誕生する。しかし孫文ら中国同盟会の革命勢力の武力は旧体制を一掃するには不十分で、結局清朝の主要軍事力を握っていた袁世凱が民国大総統の座を奪い、新たな帝政化への野心を露わにする。そして一

九一六年の袁の死後、中国各地で軍事権と行政権を一身に集めていた都督たちが次々と地方軍閥化してゆき、中国は十年以上にわたり分裂状態に陥るのであった。

三　胡適と芥川龍之介の北京検閲問答――一九二〇年代

旧体制である清王朝が滅亡し、新体制である共和国が名目ばかりの存在となってしまったこの分裂期に、知識層に新たな表現様式を与え、さらに実質的な国民国家建設の言説を形成したのが〝文学〟であった。陳独秀（チェン・トゥシウ、ちんどくしゅう、一八七九～一九四二）が主宰する雑誌『新青年』に集結した二十代末から三十代の若いインテリたちは、清末以来西欧式教育制度が育成してきた青年知識層の読者に対して、民主と科学を標榜し、全面欧化を唱える啓蒙運動を推進、その基本に口語文体の採用と近代ヨーロッパ精神の受容を掲げた文学革命を据えている。

文学革命に際し原罪（食人）意識の共有という倫理において個と民族との連帯を示唆したのが魯迅「狂人日記」（一九一八）であり、ブルジョア・ヒューマニズムを紹介したのが北京大学教授の周作人であった。こうして儒教に代わる新イデオロギーとしての文学の原型が完成される。

その後一九二一年には作家組合である文学研究会が、続けて文学結社の創造社が成立し、突如文壇が発生するが、この時期の出版市場は未成熟で智識階級に出自する職業作家というものは未だ誕生していない。作品も魯迅を除けば、僅かばかりの佳作を数えるばかりであった。そして同時に、全国的な統一的市場も軍閥割拠や欧米・日本の蚕食により未だ実現されていない。国家制度や文学の実体的形成に先がけて、文学制度の理念が形成されている点が注目される。これは西欧や日本における〝文学の誕生〟とはベクトルを逆にするものであった。

一九二一（大正十）年三月、芥川龍之介（一八九二～一九二七）は門司港をあとにして中国の旅

に出発、上海を経て六月十四日より約一か月北京に滞在、朝鮮経由で七月末帰国するまで四か月余りを中国で過ごしている。芥川は旅行中、精力的に中国の知識人と交流していたが、北京では特に同世代の北京大学英文学教授胡適と親交を温めた。『胡適の日記』にはそのようすが次のように記されている。

ついでに扶桑館に寄り日本の小説家芥川龍之介を訪ねたが、彼は外出していた。芥川は新派の小説家で、彼の短編小説は、周作人さん兄弟が数編訳したことがある。数日前、周豫才さんが訳した「羅生門」も彼のである。（一九二一年六月二十四日）

今日の午前、芥川龍之介さんが来て話した。彼は今年三十一歳で、日本で最も若い文人の一人だと自分で言っていた。彼の容貌は大変中国人に似ており、今日は中国服を着ていたので、一層中国人らしかった。この人は日本の悪習を持たぬようで、言うことも（英語を使う）大へん理解できた。（六月二十五日）

芥川の「羅生門」を中国語訳した周豫才とは魯迅のこと、芥川も北京の中国紙『晨報』に連載された翻訳を読み、名訳であると喜んでいる。芥川と胡適は会合を重ねるにつれいよいよ互いに親近感を抱くに至り、胡適の詩を日本語訳したいと芥川が申し出る一幕もあった。

さて、こうした打ちとけた雰囲気の中で、芥川は創作の自由、国家検閲体制をめぐり次のような感想を語っている点が注目される。

芥川が更に言うには、中国の著作家が享受している自由は、日本人が得ている自由に比べ遥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook